人口問題研究（J. of Population Problems）70－1（2014. 3）pp. 73～74

書　評・紹　介

Sarah Earle, Carol Komaromy and Linda L. Layne (Eds.), *Understanding Reproductive Loss: Perspectives on Life, Death and Fertility*

Ashgate Publishing, 2013, xiii+224pp.

本書は，2007年に英 Open University にて，British Sociological Association's Human Reproduction Study Group と共催されたシンポジウム（Making a difference: Experiences of reproduction and loss）における発表をもとにした，reproductive loss（生殖に伴う喪失）にかかわる問題を16章にわたって報告している．人間の生殖にかかる従来の研究では，生殖に伴う失敗や喪失より，生殖における成功やその成功を達成するための苦闘が多くとりあげられている．本書では初期・後期流産，人工中絶，死産，周産期死亡，乳児死亡，妊産婦死亡だけでなく，不妊，生殖医療による妊娠，医療行為を伴う高リスク妊娠・分娩等，通常から逸脱した生殖経験も含め喪失とし，それぞれの喪失を様々な視点や研究方法を用いて紹介している．

第１章では，「不妊」という状態と「望んでいるのに子どもがいない」という状態は一般的に混同されがちだが，例えば「不妊であり，子どもを望んでいない」や，「子どもがいるが，第２子を妊娠できない」などの例が存在し，「不妊＝望んでいるのに子どもがいない」という捉え方は不十分であることを，聞き取りを含む質的調査結果から提示している．第２章では，欧米諸国において近年まで実施されていた，知的障害をもつ女性に対する同意を得ない不妊手術の歴史的実態を質的な手法を用いて示すと共に，今日でも生物学的・社会的に妊娠できない状態を余儀なくされるという類似した実態があることから，今でも知的障害者の生殖が抑制されていると述べている．

第３章では，がん治療に伴う生殖能力の喪失に焦点をあて，治療内容や生殖医療へのアクセスに対する保健政策や制度等の違いを国際比較している．第４章では，妊娠中毒症による生命の危機を経験した患者において，生殖に対する期待が失われ，また，再形成される過程を深層インタビューを用いて考察している．第５章では，妊娠中の糖尿病患者が，正常な妊婦とかけ離れた妊婦生活を強いられる経験自体，生殖に伴う喪失体験と捉えられるとし，そのような経験がその後の妊娠を躊躇させる要因にもなると指摘している．

第６章では，胎内で順調に胎児が成長していると思っていたにもかかわらず，超音波検査によって初期流産の診断を受けることも喪失体験とし，同性カップル及び異性カップル間におけるそのような事例を紹介している．第７章では，代理母の流産事例を，代理母のための支援ウェブサイト上に記載されている議論の分析を通じて報告している．第８章では，アフリカ，カメルーン共和国の Gbigbil 村落でのフィールドワークをもとに，生殖に伴う喪失の捉え方が西洋と異なる点に着眼している．第９章では，死産経験のある者において，死産児の人間性が曖昧であるだけでなく，「親」としてのアイデンティティーも曖昧であることに対する葛藤を，聞き取り調査で明らかにしている．第10章では，流死産や新生児死亡を経験した者への支援団体に対するフィールド調査を通じて，近年見られる，亡くなった胎児・子の名付け，写真撮影，記念人形作成等の行為は社会的に容認されたりされなかったりするとし，心地の良さと不気味さ双方の性質を持ち合わせていると指摘している．第11章では，baby garden（子ども墓地）と呼ばれる，亡くなった胎児や新生児専用の墓地の意義について，墓地

の経営者やスタッフの観点を聞き取り調査で追究している．子ども墓地は，亡くなった子に保育園のような空間を提供し，公共の場で親子のつながりを保ちたいという親の要望に応えた場であると指摘している．第12章では，インターネットの発展によって，死産を経験した親達の間で，悲しみを共有する場や死産児の適切な追悼方法が形成されていったと報告している．

第13章では，20世紀から21世紀初めのオーストラリアにおける周産期死亡に対する認識の変化を，第14章ではベルギーにおける死産への対応に関する歴史的変化の調査結果を，第15章ではイギリスでの死産や新生児死亡の場における助産師による感情のケアについて報告している．第16章では，イギリスにおいて，胎児異常による人工死産，重病の新生児への延命治療の停止，そして流産に対して，患者や医療従事者の間でも反応や対応が違うことに着目し，最良事例は存在しないと述べている．

本書は多岐にわたる生殖に伴う喪失を網羅する内容となっていて，喪失の種類のみならず，喪失を経験した研究対象者も多様（同性愛者，代理母等）であり，生殖に伴う喪失の概念の広範さを考えさせられる．人口学的には流死産や新生児・乳児死亡はそれぞれ一括りにされることが多いが，それらの集団の中にも様々な段階や背景のものが存在することへの理解が深まる一冊である．また，各章で紹介されている，研究対象の特異性を考慮したユニークな研究手法も興味深い．晩産化が進む今日の日本において，生殖に伴う喪失は決して珍しくはない．表立ちにくい不妊や初期流産等による喪失の実態を把握し，それらがおよぼす人口学的影響に関する研究の蓄積が進むことに今後期待したい．

（布施香奈）